

共同企画 | 第40回医療情報学連合大会（第21回日本医療情報学会学術大会） | 共同企画

共同企画10

退院時サマリー Now and Beyond ～有用な patient summaryの確立へ～

2020年11月22日(日) 09:00 ～ 11:00 B会場 (コンGRESセンター3階・31会議室)

[5-B-1-02] 看護サマリーから生活機能サマリーへ

*宇都 由美子¹ (1. 鹿児島大学病院 医療情報部)

*Yumiko Uto¹ (1. 鹿児島大学病院 医療情報部)

キーワード : Summary of Functioning and Disability, Nursing Summary, ICF, FIM

我が国においては、高齢社会の進展に伴う疾病構造の変化や、経済格差に起因する健康格差、さらに新興感染症の発生や拡大などの新たな問題への対応が急がれている。ヘルスケアシステム改革の方策の一つとして、多職種連携及び多職種連携教育が重視されている。複数のリスクファクターを有する高齢者の増加への対応は、多職種連携によるヘルスケアの介入が極めて重要である。

高齢者が退院する時は、患者の健康状態、併存疾患、社会的側面などの要素が複雑に絡み合っているために、多職種が協働し、包括的な退院支援を提供することが求められている。診療報酬上も入退院支援加算として評価されている。退院困難な要因を有する入院中の患者であって、在宅での療養を希望する場合、あるいは入院前から支援を行っている場合、さらに、当該患者の基本的な日常生活能力、認知機能、意欲等について総合的な評価を行った上で、その評価をふまえて入退院支援を行った場合などに加算が認められ、拡大の方向で進んでいる。

多職種連携による退院支援の実践は、アセスメント、患者・家族への医療管理・ケア方法指導、退院後の生活を考慮した日常ケア、退院前合同カンファレンス、退院後のフォローアップなど多岐にわたっている。しかし、一方で、各専門職の役割についての理解の違い、ケアに対する見解の違い、優先順位の違い、専門教育の違い、多職種連携教育の不足など、実践に際しては課題も多い。

国際生活機能分類（ICF）は、健康状況と健康関連状況を記述するための統一的で標準的な言語と、概念的枠組みの提供を目的としている。看護職は施設内看護のみならず、在宅における看護まで幅広く患者・家族に関わっている。患者を全人的にとらえ、次のステージへ何を送るべき情報かを見極め、それを多職種の共通言語で記述していくことこそが、非効率的な情報交換を防ぎ、専門職のストレス軽減につながる重要な役割と考える。

看護サマリーから生活機能サマリーへ

宇都由美子^{*1}

^{*1} 鹿児島大学病院 医療情報部

Overview of nursing summary and Summary of Functioning and Disability

Yumiko Uto^{*1}

^{*1} Div.of Medical Informatics, Kagoshima University Hospital

As a measure for reforming the healthcare system, importance is placed on inter-disciplinary cooperation and training for inter-disciplinary cooperation. Given that there is a complex web of factors to consider when an elderly patient is discharged, including the patient's health status, concomitant diseases, and social aspects, there is a need for professionals from multiple disciplines to work together to provide comprehensive discharge support. Remuneration for medical treatment is recognized as an additional fee for admission/discharge support. In practice, however, there are differences in the understanding of specialists' roles, opinions on care, priority levels, and specialist education, as well as insufficient training for inter-disciplinary cooperation.

The aim of the International Classification of Functioning, Disability and Health is to provide uniform and standard terminology for recording the health status and health-related status of patients and to provide a conceptual framework. Nursing professionals have a holistic view of patients (the person under recuperation), and they are thought to play an important role in determining what information should go to the next stage of patient care (hospital transfer, home care). Thus, recording this information in a language common to different disciplines can prevent inefficient exchanges of information and alleviate the stress experienced by specialists.

Keywords: Summary of Functioning and Disability, Nursing Summary, ICF, FIM

1. はじめに

我が国においては、高齢社会の進展に伴う疾病構造の変化や、経済格差に起因する健康格差、さらに新興感染症の発生や拡大などの新たな問題への対応が急がれている。ヘルスケアシステム改革の方策の一つとして、多職種連携及び多職種連携教育が重視されている。複数のリスクファクターを有する高齢者の増加への対応は、多職種連携によるヘルスケアの介入が極めて重要である¹⁾。

高齢者が退院する時は、患者の健康状態、併存疾患、社会的側面などの要素が複雑に絡み合っているために、多職種が協働し、包括的な退院支援を提供することが求められている。一方、看護業務の中で最大の課題は記録時間による超過勤務である。リスクの高い高齢患者が増えていく中で、安心安全な医療提供のために、予見の義務や結果回避義務に関する記録量が増え、施設基準を満たすために必要な記録に追われている。

看護職は施設内看護のみならず、在宅における看護まで幅広く患者・家族に関わっている。患者(利用者)を全人的にとらえ、次のステージ(転院、在宅)へ送るべき情報を見極め、それを多職種の共通言語で記述していくことこそが、非効率的な情報交換を防ぎ、専門職のストレス軽減につながる重要な役割と考える。国際生活機能分類(ICF)は、健康状況と健康関連状況を記述するための統一的で標準的な言語と、概念的枠組みの提供を目的としている。今後、看護職が地域包括ケアシステムにおける情報提供の担い手として、記録のスリム化を図りながら、意義ある記録を残し、地域包括ケアシステムの重要な担い手となるために、ICF(International

Classification of Functioning, Disability and Health;WHO)²⁾を積極的に活用していくことを提言したい。

2. 看護記録のスリム化と意義ある記録を残すために

看護業務の中で1番問題になっているのが記録時間による超過勤務であり、長い間解決できずに今日に至っている。

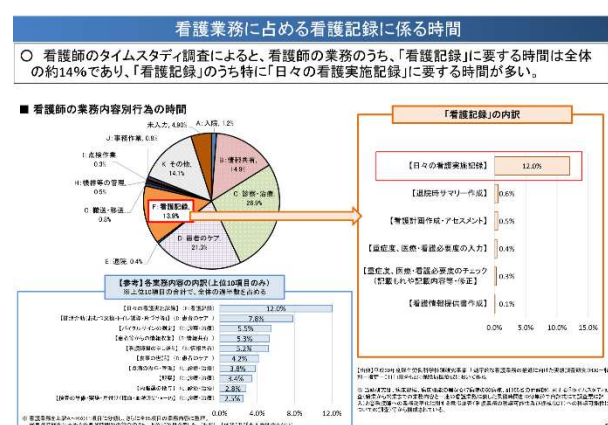


図1 看護業務に占める看護記録に係る時間

2018年度診療報酬改定の結果検証に係る特別調査「医療従事者の負担軽減、働き方改革の推進に係る評価等」によると、看護職員の業務負担の要因としては、「看護記録等の書類」が46.4%で最も多く、「看護記録等の書類」のうち、負担とな

っている書類の内訳では「看護記録」が 62.8%で最も多く、次いで「その他診療報酬に関連した書類」が 47.5%、「看護必要度に関する記録」が 41.1%であった(図1)³⁾。

リスクファクターを多く持つ高齢患者が増えていく中で、予見の義務や結果回避義務に関する記録量が増え、診療報酬とも結びついているために、看護職は施設基準を満たすための記録に迫られている。また、入院基本料の算定基準として義務付けられている看護必要度に関する記録に多くの時間を費やしてきた。電子カルテの普及が進む中、電子化された看護記録の中から必要度調査に該当するデータを自動抽出する検討は進んでいない。この現実、看護記録の中に構造化された情報が少なく、また、すべての医療機関で同じ評価の視点で記載されている情報が少なかったからである。幸い、令和 2 年度診療報酬改定において、「重症度、医療・看護必要度の測定に係る負担の軽減」として、B 項目の評価法の見直しが行われ、「根拠となる個別記録」を不要とすると変更された。代わりに、「患者の状態」と「介助の実施」に分けた評価とし、患者状態と介助に関する矛盾のない情報の収集を企図して大きく舵が切られた。実際、診療報酬の根拠となる記録は「調査のための調査」となりやすく、恣意的な判断が入りやすいという問題を含んでいる。

現在、「看護記録」から「患者記録」へという流れが進んでいる⁴⁾。これは、限られた時間の中で必要なケアを患者に提供するために、患者の最も身近な存在として絶えず看護サービスを提供している看護職が、多職種チームとの効率的な情報共有を目指そうとしている取り組みの一つである。看護職が記録する情報の意義を見直し再構築しようとしている中で、患者状態を評価し、多職種との認識に齟齬が生じないようにするためには、標準的なツールの導入と数値化が必要不可欠である。

3. 現状における多職種間での共通言語とその領域

上述した看護必要度の B 項目は、患者の ADL とそれに対する看護職による介入の評価と言える。患者の日常生活場面に関わる機会が多い職種として、看護職以外ではリハビリ専門職、介護専門職(介護福祉士)があげられる。看護職は日常生活援助として患者の ADL に接し、リハビリ専門職は病棟生活や自宅生活での ADL を想定し、身体機能の改善を目指している⁵⁾。また、介護専門職は、利用者の生活をより良い方向へ変化させるために、根拠に基づいた介護実践とともに環境を整備することを目指している。そのため互いの職種にとって患者の ADL の評価は欠かせない。すなわち、リハビリ専門職と介護福祉士、看護職の間の共通言語は ADL である。

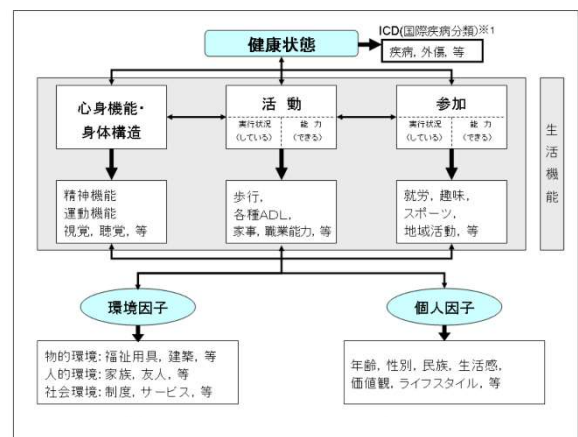
しかし、リハビリ専門職が FIM を使って患者の ADL 評価を行っているのに対して、看護職は急性期、回復期、慢性期、在宅の各領域において、共通したツールや方法で ADL を評価していない。また、介護専門職は利用者の情報収集とアセスメントを行う際に、主に ICF を用いている。図2に示すように、利用者の情報を収集し統合して、生活課題を抽出し介護計画を立案する。さらに計画の実践、実践の評価、介護計画の修正と修正した計画の実践を繰り返すという介護過程を展開している⁶⁾。

4. FIM と ICF

FIM (Functional Independence Measure: 機能的自立度評

価法)は、既に入退院時の ADL 評価、退院時サマリー、リハビリテーション総合実施計画書などで使用され、看護職においても、回復期、慢性期では利用されている。また、2016 年度診療報酬改定により、回復期リハビリテーション病棟の効果実績の評価基準として実績指数が導入され、この ADL スコアの評価に FIM が適用された。また、2018 年度診療報酬改定により、この実績指数が高いほど回復期リハビリテーション入院料の報酬が引き上げられるようになった。このように近年、実績指数を算出するために回復期病棟では FIM の評価が必須となっている。FIM の評価項目は、運動項目 13 項目と認知項目 5 項目から構成され、計 18 項目を 1~7 点(最大 126 点)で採点する。各項目の点数や合計点数で ADL 能力と介護量を把握することができ、医学的知識がない人でも使用できるため、介護現場などでも使用されている。FIM が診療報酬と結びつくことにより、汎用性の高い評価項目として拡大していくことが予測される。

しかしながら、患者把握のための評価指標としての FIM の限界は、ADL を中心とする評価であり、ICF のような患者及び利用者を生活者としてとらえるという視点が不足している。ICF の構造の特徴は、背景因子と生活機能に大別され、環境や個人因子を重視し、生活機能については身体、個人、社会レベルの視点から、身体機能・身体構造、活動、参加という3つの次元があり、それらが相互に影響し合うというモデルである。



(出典)厚生労働省大臣官房統計情報部編「生活機能分類の活用に向けて」
※1: ICD(国際疾病分類)は、疾病や外傷等について国際的に標準化された分類体系であり、WHO(世界保健機関)が作成したものである。ICDが病名や外傷を詳しく分類するものであるのに対し、ICFはそうした病名等の状態にある人の精神機能や運動機能、歩行や家事等の活動、就労や趣味等への参加の状態を環境因子等のかかわりにおいて把握するものである。

図2 ICF 構成要素間の相互作用

5. 看護サマリーから生活機能サマリーへ

少子高齢化の進展とともに人口が減少する日本においては、患者像・利用者像が変わりつつある。侵襲性の高い治療を積極的に行い、社会的生産性を維持・発展させるための急性期医療から、要介護状態となっても、住み慣れた地域で自分らしい生活を最後まで続けることができるように、地域内で助け合う体制構築へとドラスティックな改革が進められている⁷⁾。地域包括ケアシステムのキーワードは「生活」である。「今までと同じ場所で同じ生活をしたい」という思いを持つ患者・利用者を看護職が支え、地域包括ケアシステムを強化していく上で欠かせないのが、多職種との協働であり、それを支える情報共有である。施設から地域へ、そしてその逆もある双方向性の患者・利用者情報の交換において、多職種が「生活」をキーワードとする共通言語で話せるようになれば、非効率的な情報交換を防ぎ、専門職のストレス軽減につながる。

前述したように、ADL の評価において、現在最も汎用性が

高い評価法はFIMである。リハビリ専門職や回復期リハビリテーション病棟、あるいは介護の現場においては、看護職や介護職も利用している。このような状況を考慮すると、FIMとICFのマッピングは必要不可欠であり、その過程において、細かい項目が多過ぎて全体像が分かりづらいというICFの構造上の課題も解決されていくべきである。これについては、ICFをより実用的に用いるためのツールとしてICFコアセットが開発され、使用目的によって使い分けられるという取り組みも行われている。

地域包括ケアシステムを支える看護職は、急性期から慢性期・終末期を通じて、診療の補助と療養の世話を専門としている。患者・利用者が次の医療機関や施設に移動する際には、看護サマリーを作成し継続したケアが提供できるように情報提供を行っている。ただ残念なことに、看護サマリーが効果的な情報提供書として、必ずしも機能しているとは言い難い。看護職が日常的にICFを使いこなせるまでには、長期的な展望と相当な時間を要すると思われる。では、どこから手掛けていけばよいか。本シンポジウムを企画された渡邊直先生が提唱されているように、「生活機能サマリーの標準的構築と記載の担い手になる」という道筋が、最も実現可能性が高いと思われる。「看護記録から患者記録へ」、「看護サマリーから生活機能サマリーへ」、地域包括ケアシステム時代の看護職の情報提供の力量が問われている。

参考文献

- 1) Beswick,A.D.,Rees,K.,Dieppe,P.,Ayis,S.,Gooberman-Hill,R.,Horwood,J.,et al.(2008).Complex interventions to improve physical function and maintain independent living in elderly people: A systematic review and meta-analysis. The Lancet, 371(9614),725-735.[https://doi.org/10.1016/S0140-6736\(08\)60342-6](https://doi.org/10.1016/S0140-6736(08)60342-6).
- 2) World Health Organization (2001). International classification of functioning, disability and health: ICF. Geneva: World Health Organization.
- 3) 令和2年度診療報酬改定の概要(入院医療)厚生労働省保険局医療課
<https://www.mhlw.go.jp/content/12400000/000612671.pdf>.
- 4) 井部俊子、竹股喜代子監修:看護記録のゆくえ「看護記録」から「患者記録」へ(2000)、日本看護協会出版会
- 5) 久保和也:多職種連携における共有すべき情報の課題2)理学療法士からの要望(2018)、46-49、情報をつないで多職種連携がうまくいく看護記録の活用術、MC メディカ出版。
[<http://bama.ua.edu/~jhooper/> (cited 2007-Feb-23)].
- 6) 鈴木亨:多職種連携における共有すべき情報の課題4)介護福祉士からの要望(2018)、52-55、情報をつないで多職種連携がうまくいく看護記録の活用術、MC メディカ出版。
- 7) 地域包括ケアシステム 厚生労働省:
https://www.mhlw.go.jp/stf/seisakunitsuite/bunya/hukushi_kaigo/kaigo_koureisha/chiiki-houkatsu/.